

## 【連載】2 台湾文壇-詩壇・現代詩論争

戦後、台湾詩壇は、1950年、『自立晩報』の「新詩週刊」、53年紀弦による『現代詩』や覃子豪による『公論報』の「藍星週刊」、1954年には張黙、洛夫などによる『創世期』の創刊など、ほぼ十年、欧米現代詩潮の影響のもとに成長してきたが、非現実的、技巧主義の袋小路に迷いこんだ。この理念なき詩壇の状況に対決して、1964年、台湾籍詩人吳瀛涛、桓夫、詹冰、錦連、白萩、趙天儀、薛柏谷、黃荷生、王憲陽、杜国清、古貝らが笠詩刊社を設立、郷土色、現実直視、批判精神を旗印に現代詩の浄化をめざした。二十年にわたり、李魁賢、何瑞雄、葉笛、鄭炯明、拾虹、陳明台、古添洪、非馬などの詩人を傘下に結集して隠然たる影響力を保持している。『笠』の成立後、雨後の筍のごとく詩誌が発行され、複雑な様相を呈している。1972-73年、唐文標（本会報第三号P.12-14参照）の現代詩批判提起は、現代主義模倣、自己陶醉、無病の呻吟に対するカンフル剤であったが、現代詩をいかに大衆の中に定着させるかが今後の課題である。◆◆◆台湾文壇における詩論争としては、“現代詩論争”がある。1960年代、シュール・リアリズム、イマジズム、実存主義など世界のさまざまな思潮をとりいれた台湾現代詩の、70年代にはいつてからのナショナリズムの抬頭とともに起きた現代詩再検討を巡る論争。唐文標の、「僵硬的現代詩」（『中外文学』1971年2巻3期）、「詩的没落」（『文季季刊』1971年1期）、「先検討我们自己吧」（『中外文学』1972年1巻6期）などの一連の論文、関傑明の「中国現代詩的幻滅」（『中国時報』）などが、台湾現代詩の現状は蹈晦、ニヒル、退廃の極に達しているとして、現代派詩人の余光中、痲弦、葉珊、周夢蝶などは欧米の残滓を拾うものとして批判し、現代詩は社会性、民族性を必要とする主張。これに対して余光中が「詩人何罪」（『中外文学』2巻6期）で、顔元叔が「唐文標事件」（『中外文学』2巻6期）で反論を加え、激しい論争が展開された。論争の結果、現代主義的思潮の抬頭がみられることになる。（葉 寄民）